

英文研究室の思い出

磯 部 祐実子

(2003 年度 B, 2010 年度 D)

大学院入試二日目、面接試験のその日、およそ四年ぶりに英文研究室に入った。数時間チャペルで待った後、ようやく面接の順番が回ってきたのだが、今改めて思い返してみると、チャペルと研究室の間をどの順路で進み、その間どのようなことを考えながら歩き、扉をくぐったのか、行きも帰りもその記憶がすっかり抜け落ちている。それなのに、研究室の中で見た光景は強く印象に残っている。その日の研究室は、面接用に部屋のレイアウトが変えられていた。テーブルやソファは見当たらず、受験者の私が中央芝生に面した窓を右手にし、面接官の先生方三名と向かい合うようにして座ると、その間には遮るものが何もなかった。

研究員となった今でこそ、大学に来るとまず研究室に顔を出し、先生方や院生、研究員、補佐の方々と話をすることがごく当たり前のようにになっている。しかし、大学学部生のころは研究室を訪れることなどめったになく、ゼミ選択や卒業論文といった諸々の書類を提出するような時に、恐る恐る扉を開けたくらいしか記憶がない。あの扉の向こうには学部生が足を踏み入れるには恐れ多い、研究者のための特別な空間が広がっているように思っていた。そしてあの背の高い扉を前にするといつも妙に緊張し、用が済むと居心地の悪いような、後ろめたいような気持ちになって、足早に部屋を後にしていた。

そういうわけで、研究室の部屋の中をじっくりと見回したのは、この大学院入試の面接の時が初めてであったように思う。部屋はとても広く感じられ、本棚に並べられた見るからに古そうな本に見下ろされているような気分になった。そして、今ソファのあるあたりに座っていらっしゃる先生が、数

十メートル先ではなかろうかと思うほど、離れたところに座られているように感じた。先生方は、私にこれまでの経歴や研究（と言えるほどのことではなかったけれど）、これからのことなどを尋ねられたが、今思い出してみてもその姿は「偉大で大きな」存在というよりも、むしろとても小さく私の目に映っていた。先生方と私の間にはそれほどの距離あり、文学研究という世界の戸口に立とうとしていた私には、先生方がはるか遠い存在に思えた。

博士課程後期課程に進学してからは、副室で行われる演習の前後に、この研究室で他の院生や研究員たちと授業や研究のことから他愛もない世間話まで、あれやこれやとおしゃべりをして過ごした。私は研究室の中において、やってくる学部生を迎える側へと立場を変えた。扉を開けて入ってくる彼らのしぐさを見ていると、おそらく今の学生の多くも私が学部時代に抱いていたのと同じ気持ちでこの研究室を訪れているように感じる。研究の年数を一年、一年重ね、それにつれて研究室は居心地のよい場所となった。今となつては、面接を受けた時のような部屋の大きさを感じることはない。そして研究室を訪れるたび、あの時感じた距離が少しずつでも縮まっているだろうかという思いがよぎる。

